様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年４月１日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）（海外）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８４０２０３７
研究課題名（和文）途上国における持続可能な発展戦略と国際支援システムに関する研究
研究課題名（英文）　A strategy of sustainable development in developing countries and international supporting system

研究代表者
満田　久義（MITSUDA　HISAYOSHI）
佛教大学・社会学部・教授
研究者番号：60131306

研究成果の概要：
本研究は、インドネシア国立マタラム大学との国際共同研究として、途上国の最貧地域における持続可能な地域づくりとはいかなるものか、またその実現のために、先進国と途上国の相互協力システムをいかに構築すべきかを学際研究した。とくに、ロンボク島の持続可能な発展モデルを構築するための教育・研究センター（The Center for Eco-Literacy in Lombok：CELL）を拠点に国際共同研究を実施した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	3,300,000	0	3,300,000
２００７年度	2,600,000	780,000	3,380,000
２００８年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
総　計	7,900,000	1,380,000	9,280,000

研究分野：社会科学Ｂ
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：持続可能な発展、マラリア、パンデミック、エコツーリズム、社会的貧困

１．研究開始当初の背景

2002 年から 05 年まで、マタラム大学農村開発研究センターと共同研究を実施。その成果として、SUSTAINABLE LOMBOK: The Rich Nature and Rich People in the 21st Century. Mataram University Press, 2005 を刊行した。

2006 年満田久義が同大学医学部客員教授として招聘されたことを契機に、持続可能な発展戦略に関する国際共同プロジェクトが成立。特に 06 年からは「マラリア・コントロール・プロジェクト」に参画し、05 年のロンボク島でのマラリアアウトブレイクを事例とした「社会的貧困とマラリア感染」の社会疫学的研究を行った。

本研究は、持続可能な発展戦略としてのマラリア撲滅を目指したものであるが、とくに、マラリアアウトブレイクのコントロールを可能したものであり、その先駆的研究として位置づけられる。

２．研究の目的

この国際共同研究は、地球環境変動、特に地球温暖化が熱帯感染症パンデミック(世界

的流行)にどのような影響を与えるかを、とくに 2005 年インドネシアで発生したマラリア・アウトブレイクに焦点を当てて、社会疫学的観点から理論的実証的に解明することを目的とする。

マラリアは、毎年２～３億人の患者と１５０～２００万人の死者をだす最悪の感染症である。マラリアの主たる感染地域である熱帯途上国では、個人レベルの保健医療問題のみならず、地域や国家レベルでの持続可能な発展戦略にとっても大きな障害となっている。マラリア問題の根底には、医学的な要因だけではなく、劣悪な衛生環境や栄養状態、経済的貧困、社会関係資本不足、ジェンダー的差別、教育不足などの人間貧困の悪循環からくる「生存権の剥奪状況」がある。我々の予備的な研究によって、伝統的なマラリア対策の限界が露呈しその根本的な再検討が議論されている。

従来のマラリア対策の中心である①発生源のハマダラ蚊の撲滅（生息環境の埋立や浄化、薬剤散布など）、②マラリア患者に対する医学的治療・予防だけでは、マラリア撲滅は不可能なだけでなく、マラリア感染の拡大、更にはマラリア・パンデミックが予想される。

このような研究課題のもと、満田は 2006 年からインドネシア国立マタラム大学医学部の招聘教授として国際共同研究「マラリア・コントロール・プログラム（2006-10）」に参画した。

本研究の主眼は、マラリア発生メカニズムの医学的解明だけではなく、マラリア感染拡大の経済的、政治的、社会的、文化的環境を含めた社会疫学的研究にある。とくにマラリア患者を取り巻く人間貧困の社会学的解明という従来のマラリア研究では看過されてきた新たなアプローチを導入し、地域社会のエンパワーメントを政策戦略としたマラリアの社会的解決をも含めた総合対策を提言する。

本研究は、予知される世界的なパンデミックに対する社会的影響、特にその損失を、だれが、いかにしておこなうのかを、地球益や Global Social Responsibility (GSR)論と関連させて議論、発展する可能性を秘めている。グローバルな課題として意義がある。

３．研究の方法

マタラム大学の熱帯医学スタッフと協力して、マラリア・アウトブレイク（2005）によって２万人の罹患者が出た東ロンボク島のクルアク、ジェロアロ、ラブアン・ハジの３地域において、宗教的指導者・政府役人・医者・学校関係者・社会活動家・主婦などを対象に、マラリアに関するインタビューと資料収集を行い、約２万人の地域住民を対象にマラリア血液診断とマラリアに関する社会疫学的な意識調査を実施。東ロンボク 3 地域の各集落に 66 名の調査員を配置し、マラリア教育ファシリティター(Malaria Village Worker)のための研修マニュアルの作成。そして MVW 主導による「住民主体参画型」マラリア対策を社会実験した。

さらに、国際医療支援活動として、マラリア診断キットによるピンポイント支援の推進を図るために、ヘパティカ研究所でのキット現地生産を調査。マラリア・フロント基金の創設によって、ロンボク島、スンバワ島の僻地診療所へのマラリア診断キットの寄贈活動の継続可能性を研究した。

本研究の最大の特色は、現場主義を貫徹したことにある。エコツーリズムの研究は当然としても、マラリア感染地域の村々を訪問し、各世帯代表および情報通（医者・警察官・役人・教師など）から地域社会の社会的経済的貧困に加えて、宗教がもたらすマラリア拡大へのプラスとマイナスの影響、さらにマラリア教育の必要性などを調査した点は自負している。

このような医学的知識と社会学的フィールド調査を相互に関連させた方法論は、これまでの感染症の社会疫学的研究において、ほとんど顧みられなかった、欠落していた領域であり、本研究の独創性を見ることができる。

４．研究成果

本国際共同研究の具体的な成果は、①ニッチ産業としての有機農業と持続的林業とを組み合わせながら、東ロンボク島の地域経済活性化と原生自然保全の両立を目指した持続可能な発展戦略としてのエコツーリズム導入に関する総合的研究（「Sustainable Lombok」マタラム大学出版局 2005 年刊行の追跡研究）と②マタラム大学医学部と協力し、持続可能な発展戦略としてのマラリア撲滅を目指す「マラリア・コントロール・プログラム」研究の２点である。

さらに、本研究では、従来的な先進国から途上国への一方向性の援助関係を超えて、共利繁栄できる双方向性の国際協力システムの構築に力点を置いた。

特に「マラリアコントロールプログラム」研究は、喫緊に迫る感染症パンデミックへの社会的対策を、社会疫学的フィールド調査に基づいて、国際共同研究しようとするものであり、そのテーマからしても今日的意義は高いといえる。また、本国際共同研究では、医学と社会学研究者による学際的な研究チームを構成し、かつ、日本とインドネシアの相互協力関係を前提とし、実際にインドネシア・東ロンボク島での社会実験を試みるとい

うものである。また政策議論として、社会的貧困や差別にも焦点を当てた議論に基づき、社会的な対策を提言している。

本研究ではマラリア・アウトブレイクと感染拡大の理論的スキームとして以下の図式を検討した。マラリア・アウトブレイク発生要因は、①地球気候変動による集中豪雨がハマダラ蚊の異常発生を生起させたこと（気候変動要因）、②森林やラグーンの乱開発で、蚊の生息環境が居住地域に近接したこと（環境破壊要因）、③都市化・工業化に伴い労働力移動が頻繁になり、マラリア患者の地域拡散が、急速かつ広範になったこと（社会変動要因）などが複合要因としてあげる。

さらに感染拡大が辺境の地で生起したことで、マラリア感染者数が地域診療体制の限界を超え、機能不全に陥ることで、さらなる感染拡大が進行する悪循環を指摘する。本研究では、地球温暖化や経済のグローバル化に起因するマラリア･パンデミックの環境的社会的影響評価を強く認識できた。

フィールドにおける社会的実践として試みた「マラリア・ヴィレッジ・ワーカー（ＭＶW)は、単なる Community Health Worker の機能を超えて、マラリア教育の担い手、医学情報システムの単位としても有効であることが分かった。

国際医療支援活動として、京都に「マラリアフロント基金（Malaria Front Fund)」の仮設立をし、マラリア診断キットの現地生産とマラリア感染地域への直接的なキット寄贈を行った。新聞報道などで多くの支援者を得たが、基金の組織的な問題として、国内での多額の経常経費処理（人件費を含めて）と有能な人材確保と持続性などが、喫緊に解決すべき点としてあげられる。国際ＮＰＯへの発展を意図しているが、その道のりは困難に満ちており、組織維持することすら苦悶している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３ 件）

①Mitsuda Hisayoshi, Mulyanto, Mohammad Rizki, and Adnanto Wiweko
A Study on MALARIA CONTROL PROGRAM (MCP) in Lombok and Sumbawa,Indonesia: In-Depth Interviews and Collecting Baseline Data and Epidemiological/Sociological Survey (CBDESS II)
佛教大学社会学部論集（査読無）第 48 号、2009 年 3 月、pp.51-69

②Mitsuda Hisayoshi, Mulyanto, Mohammad Rizki, and Adnanto Wiweko
A Study on MALARIA CONTROL PROGRAM (MCP) in East Lombok, Indonesia: In-Depth Interviews and Collecting Baseline Data and Epidemiological/Sociological Survey (CBDESS)－Part.2－
佛教大学社会学部論集（査読無）第 46 号 2008 年 3 月、pp.79-96

③Mitsuda Hisayoshi Mulyanto, Bobby Syahrizal, Mohammad Rizki, and Adnanto Wiweko
A Study on MALARIA CONTROL PROGRAM (MCP) in East Lombok, Indonesia: In-Depth Interviews and Collecting Baseline Data and Epidemiological/Sociological Survey (CBDESS) －Part.1－
佛教大学社会学部論集（査読無）第 45 号、2007 年 9 月、pp.67-82

〔学会発表〕（計 1 件）

① Mitsuda Hisayoshi
Global Environmental Change and Global Social Responsibility: An International Supporting Activity of Japan protecting against Malaria Outbreak in Indonesia, The International Symposium on the East Asian Environmental Problems, Movements, and Policies ,2008 年 10 月、Hosei University:Tokyo

〔図書〕（計 1 件）

①2007. Mitsuda H and Mulyanto (eds.)
MALARIA CONTROL PROGRAM: Collecting Baseline Data and Epidemiological /Sociological Survey: PROGRESS REPORT. 2007 年 10 月、
School of Medicine, Mataram University

６．研究組織

(1)研究代表者

満田　久義（MITSUDA HISAYOSHI）
佛教大学・社会学部・教授
研究者番号：60131306

(2)研究分担者

(3)連携研究者

内藤　正明（NAITO MASAAKI）
佛教大学・社会学部・教授
研究者番号：40101042

林　隆紀（HAYASHI TAKANORI）
佛教大学・社会学部・講師
研究者番号：20264806